# かぐや姫の生ひ立ち

## 要旨

竹取の翁が、ある日竹の中に小さな女の子を見つけた。少女は翁夫婦に養われてすくすくと育ち、三か月くらいするうちに美しい一人前の女性となって、世の男たちから求婚されるようになった。

## 構成

| 段落 | ページ・行 | 段意 |
|---|---|---|
| 第一 | 初め～P四六・8〈籠に入れて養ふ。〉 | 竹取の翁が、光る竹の中に小さな女の子を見つけ、家へ連れ帰って育てた。 |
| 第二 | P四六・9〈竹取の翁〉～P四六・10〈豊かになりゆく。〉 | この少女を見つけてから、翁が竹を取ると、黄金（こがね）のつまった竹が見つかるようになり、翁はしだいに裕福になっていった。 |
| 第三 | P四七・1〈この児〉～P四七・8〈腹立たしきことも慰みけり。〉 | 少女は成長し、三か月で一人前の女性になったので、翁は、姫君の髪上げ・裳着（もぎ）（成人式）をした。姫君の美しさは光り輝き、翁は苦しいときも腹立たしいときも、慰められた。 |
| 第四 | P四七・9〈翁、竹を取ること〉～終わり | 姫君が成人したので、翁は命名式を行い、なよ竹のかぐや姫と名付けた。多くの客を招いて宴会を催したところ、世の全ての男たちはうわさに聞いて、妻にしたいと心を乱した。 |

## 品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①今は　昔、竹取の翁と　いふ　者　あり　けり。②野山に
係助・区別　格助・引用　ラ変・用　過・終　格助・場所

まじりて　竹を　取りつつ、よろづの　ことに　使ひ
ラ四・用　接助・単接　格助・対象　ラ四・用　接助・反復　格助・体修　格助・自的　八四・用

けり。③名をば　讃岐の造と　いひ　ける。④
過・終　連語（格助・対象＋係助・強意）　格助・引用　係助・強意（係）　八四・用　過・体（結）

その　竹の　中に、もと　光る　竹なむ　一筋　あり
代　格助・体修　格助・体修　格助・場所　ラ四・体　係助・強意（係）　ラ変・用

ける。⑤あやしがりて　寄りて　見るに、筒の　中
過・体（結）　ラ四・用　接助・単接　ラ四・用　接助・単接　マ上一・体　接助・単接　格助・体修

光りたり。⑥それを　見れば、三寸ばかりなる　人、いと
ラ四・用　存・終　代　格助・対象　マ上一・已　接助・順偶　副助・程度　断・体　副

うつくしうてゐたり。⑦翁、言ふやう、「わが
形シク・用（ウ音）　接助・単接　ワ上一・用　存・終　八四・体　代　格助・主格

夕ごとに　見る　竹の　中に　おはする　にて、知り
格助・時間　マ上一・体　格助・体修　格助・場所　サ変・体（尊）翁→かぐや姫　格助・理由　ラ四・用

ぬ。子に　なり　給ふ　べき　人な　めり。」とて、
完・終　格助・変化　ラ四・用　補動・八四・終（尊）翁→かぐや姫　当・体　断・体（撥音）　定・終　格助・引用

手に　うち入れて、家へ　持ちて　来ぬ。⑧妻
格助・場所　ラ下二・用　接助・単接　格助・方向　タ四・用　接助・単接　カ変・用　完・終

の　嫗に　預けて　養はす。⑨うつくしき　こと
格助・体修　格助・対象　カ下二・用　接助・単接　八四・未　使・終　形シク・体

限りなし。
形ク・終

①今となっては昔のことだが、竹取の翁という者がいた。②野山に分け入って竹を取っては、さまざまなことに使っていた。③名前を讃岐の造といった。④その竹の中に、根元が光る竹が一本あった。⑤不思議に思って近寄って見ると、筒の中が光っている。⑥それを見ると、三寸くらいの人が、実にかわいらしい様子で座っている。⑦翁が、言うことには、「私が朝夕いつも見る竹の中にいらっしゃることで、分かった。子になってくださるはずの人であるようだ。」と言って、手の中にひょいと入れて、家へ持って来た。⑧妻の嫗に任せて育てさせる。⑨かわいらしいことはこの上もない。⑩実に小さいので、籠に入れて育てる。

⑩いと　幼けれ　ば、　籠に　入れ　て　養ふ。
副　形ク・已　接助・順理　格助・場所　ラ下二・用　接助・単接　八四・終

⑪竹取の翁、竹を　取る　に、　この　子を　見つけ　て　のち　に　竹　取る　に、　節を　隔て　て　よごと　に、　黄金ある　竹を　見つくる　こと　重なり　ぬ。
格助・対象　ラ四・体　格助・時間　代　格助・体修　格助・対象　カ下二・用　接助・単接　格助・対象　カ下二・体　接助・単接　格助・対象　タ下二・用　接助・単接　ラ四・用　完・終

⑫かくて、翁、やうやう　豊かに　なりゆく。
接　副　形動ナリ・用　カ四・終

⑬この　児、養ふ　ほど　に、　すくすくと　大きに　なりまさる。
代　格助・体修　八四・体　格助・時間　副　形動ナリ・用　ラ四・終

⑭三月ばかり　に　なる　ほど　に、　よき　ほど　なる　人　に　なり　ぬれ　ば、　髪上げ　など　さうし　て、　髪　上げ　させ、　裳　着す。
副助・程度　格助・変化　ラ四・体　格助・時間　形ク・体　断・体　格助・変化　ラ四・用　完・已　接助・順理　副助・例示　サ変・用　接助・単接　ガ下二・未　使・用　サ下二・終

⑮帳の　うち　より　も　出ださ　ず、　いつき　養ふ。⑯この　児の　かたち、けうらなる　こと　世に　なく、屋の　うち　は　暗き　所　なく　光　満ち　たり。
格助・体修　格助・起点　係助・同類　サ四・未　打・用　カ四・用　八四・終　代　格助・体修　形動ナリ・体　格助・場所　形ク・用　格助・体修　係助・区別　形ク・体　形ク・用　タ四・用　存・終

⑰翁、心地　悪しく　苦しき　こと　も　ときも、この　子を　見れ　ば、　苦しき　こと　も
格助・対象　マ上一・已　接助・順恒　形シク・体　係助・列挙　係助・同類　代　格助・体修　格助・対象　形シク・用　係助・列挙

⑪竹取の翁が、竹を取るときに、この子を見つけて以後に竹を取ると、節と節の間の空洞の一つ一つに、黄金がある竹を見つけることが何度もあった。⑫こうして、翁は、だんだんと裕福になってゆく。

⑬この幼子は、育てるうちに、ぐんぐんと大きく成長してゆく。⑭三か月くらいになる頃に、一人前の大きさの人になったので、髪上げなどのことをさまざまに準備して、髪を結い上げさせ、裳を着せる。⑮帳の中からも出さずに、大切にかしずき育てる。⑯この幼子の顔だちは、清らかで美しいことこの上もなく、家の中は暗い所がなく光が満ちている。⑰翁は、気分が悪く苦しいときでも、この子を見ると必ず、苦しいことも治まってしまう。⑱腹が立つようなことでも心が静まった。

やみ　ぬ。⑱腹立たしき　こと　も　係助・列挙　慰み　けり。
マ四・用　完・終　形シク・体　マ四・用　過・終

⑲翁、竹を　取る　こと　久しく　なり　ぬ。⑳勢ひ　猛の
格助・対象　ラ四・体　形シク・用　ラ四・用　完・終　形動ナリ・語幹　格助・体修

者に　なり　に　けり。㉑この　子　いと　大きに　なり　ぬれ
格助・変化　ラ四・用　完・用　過・終　代　格助・体修　副　形動ナリ・用　ラ四・用　完・已

ば、名を、御室戸斎部の秋田を　呼び　て、付け　さす。
接助・順理　格助・対象　格助・対象　バ四・用　接助・単接　カ下二・未　使・終

㉒秋田、なよ竹のかぐや姫と　付け　つ。㉓この　ほど　三日、
格助・引用　カ下二・用　完・終　代　格助・体修

うちあげ　遊ぶ。㉔よろづ　の　遊び　を　ぞ　し　ける。
ガ下二・用　バ四・終　格助・体修　格助・対象　係助・強意(係)　サ変・用　過・体(結)

㉕男は　うけきらは　ず　呼び集へ　て、いと　かしこく　遊ぶ。㉖世
係助・区別　八四・未　打・用　八下二・用　接助・単接　副　形ク・用　バ四・終

界の　をのこ、あてなる　も　いやしき　も、いかで　この
格助・体修　形動ナリ・体　係助・列挙　形シク・体　係助・列挙　副　代　格助・体修

かぐや姫を　得　てしがな、見　てしがな　と、音に
格助・対象　ア下二・用　終助・自願　マ上一・用　終助・自願　格助・引用　格助・手段

聞き、めで　て　惑ふ。
カ四・用　ダ下二・用　接助・単接　八四・終

⑲翁は、（黄金の入った）竹を取ることが長く続いた。⑳富裕で勢力のある者になっていった。㉑この子はたいそう大きくなったので、名前を、御室戸斎部の秋田を招いて、付けさせる。㉒秋田は、なよ竹のかぐや姫と付けた。㉓このとき三日間、宴会を開き音楽を奏でて楽しむ。㉔さまざまな歌舞音曲を演奏して楽しんだ。㉕男は誰でも構わず招き集めて、たいそう盛大に管弦の宴を催す。㉖この世の男は、身分の高い者も低い者も、何とかしてこのかぐや姫を妻にしたい、会いたいと、うわさを聞き、恋い慕って心が乱れる。

## 学習活動のポイント

### ■導入

**学習活動のポイント**

❶「竹取物語」について知っていることを発表する。知技(2)イ
❷「竹取物語」の全体の構成・展開について理解する。

❶幼い頃に聞いたかぐや姫の話の内容を発表させ、黒板に整理する。

**【評価】** 古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

❷❶で整理した内容を使い、誕生・求婚・昇天の三部構成になっていることを解説する。

### ■展開

**学習活動のポイント**

❶「かぐや姫の生ひ立ち」を音読する。思判表B(1)ア
❷教師の範読を聞きながら、大意を押さえ、解釈が難しい部分を指摘する。知技(1)エ
❸古語の意味・用法、文法事項に注意しながら、現代語訳する。（「古文を読むために5」を参照する）知技(1)ウオ・(2)ウ
→**「言葉と表現」1**
❹当時の風俗・習慣について理解を深める。思判表B(1)エ
❺かぐや姫が普通の人間と異っているところを指摘する。思判表B(1)ア
→**「学習のポイント」1**
❻翁のかぐや姫に対する行動、かぐや姫の様子を現代語訳を参考にまとめる。思判表B(1)イ
→**「学習のポイント」2**

❶指名して、ゆっくり正確に音読させる。学習の最後にも内容を理解したうえで、ふさわしい音読を工夫するように指導し、音読させる。

**【評価】**「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷難解な箇所は少ないので、現代語と意味の異なる語（「ゐる」「うつくし」「やうやう」など）を指摘し、古語辞典などで意味を確認させる。

**【評価】** 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、確認する。

❸助動詞の意味や、係り結び、形容動詞の語幹用法、終助詞「てしがな」などに注意して正確に現代語訳させ、全体の内容をつかませる。「古文を読むために5」を参考にし、現代語と意味の異なる語に注意し、助詞や助動詞の意味・用法をつかみながら、文章を正確に理解できたか。部分部分を現代語訳させ、正確さを見極める。文脈をたどりながら古文を読む力については、主としてペーパーテスト（小テスト・定期考査）で確認する。

**【評価】**我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❹「髪上げ」「裳着」などの古典特有の風俗について、結婚を含めた平安時代の貴族の一生について説明する。

**【評価】**作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、ペーパーテストにより、確認する。

❺読み取ったことを発表させ、箇条書きにしていく。かぐや姫が人間と異なっているところ、翁のかぐや姫に対する気持ちへの理解度は発表を求め、その様子で判断する。

**【評価】**かぐや姫の様子について、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、確認する。

❻翁の行動とかぐや姫の様子を二段組にして表化する。奇異なできごとながら、かぐや姫の面倒をみることで、裕福になったり、心が和んだりしていることを指名により確認する。定期考査などにまとめの問題として織り込んでもよい。

**【評価】**かぐや姫と翁の様子について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、確認する。

## ■まとめと発展

### 学習活動のポイント

❶本文中から過去や完了の意味を持つ助動詞を探し、本文のどの位置に表れるか、確認させる。知技(1)ア・(2)エ 主態
→**「言語活動」1**

❷「五人の貴公子の求婚」について概略を聞き、物語の全体像をつかむ。

❶「けり」「たり」「ぬ」「つ」の四つの助動詞ごとに、どのような文脈の中に現れるかを確認させ、助動詞の使い分けについて理解を深めさせる。

**【評価】**言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。
・進んで文語助詞の種類と用法を理解し、学習課題に沿って、本文中から過去や完了の意味を持つ助動詞を探し、本文のどの位置に現れるかを確認して、物語の構造を捉えようとしているか、分析する。

❷次の「かぐや姫の嘆き」を読解するうえでも参考になるので、生徒の興味を引くように、概略を説明する。

## 指導上の注意点と発問例

●四六ページ

**問** **「今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。」（2行目）について、**
**[1] 現代語訳せよ。**
**[2] 「今」とは「竹取物語」成立時頃のことを意味すると考えられるが、何時代のことか答えよ。**

**答** [1]今となっては昔のことだが竹取の翁という者がいた。[2]平安時代（前期）

**問** **「竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。」（2行目）について、**
**[1] 「つつ」を文法的に説明せよ。**
**[2] 「よろづのことに使ひけり。」とあるが、例えばどのようなものに「竹」を使ったと考えられるか。**

**答** [1]動作の反復を表す接続助詞　[2]ざる、籠など

**問** **「造となむいひける。」（3行目）、「竹なむ一筋ありける。」（4行目）について、**
**[1] 文末が「けり」ではなく「ける」になっている理由を文法的に説明せよ。**
**[2] 前問[1]のように、結び（文末）を連体形に変える働きを持つ語（係助詞）を「なむ」以外に三つあげよ。**

**答** [1]係助詞「なむ」が上にあるので、係り結

## 語句の研究

●四六ページ

**2 竹取の翁といふ者**　「『竹取の翁』と（世人が）いう者」の意。「竹取の翁」は、竹の採取加工を生業とする老人。「といふ者」と珍しい存在を紹介する語り方である。

**2 まじりて**　分け入って。「野山にまじり」の例として、「源氏物語」椎本巻に「今はまして、野山にまじりはべらむも、いかなる木の本をかは頼むべくはべらむ」とある。

**2 竹を取りつつ**　ここでいう竹は、真竹・淡竹など。

**2 よろづのこと**　籠、笊、箒、簀の子などさまざまな竹器の製作をいうのであろう。

**3 をば**　対象の格助詞「を」に、強調の係助詞「は」が付いて連濁した連語。単に「を」と言うよりも強調した表現。

**3 讃岐の造**　「讃岐」が氏、「造」は後の箇所に「造麻呂」ともある翁の名。「讃岐」は大和の国広瀬郡散吉郷（奈良県北葛城郡河合町）の「散吉」によるか。「造」は古代の姓の一つだが、ここは個人名を指す。「讃岐」は底本の「新日本古典文学大系」は「さかき」とするが、意を以て改めた。古本系諸本・古活字本は「さるき」、群書類従本は「さぬき」。「か／る／ぬ」の変体仮名の類似により、異同が生じたものと見られる。

**4 あやしがりて**　「がる」は、名詞や形容詞・形容動詞の語幹などに付いて「…のように感じる、…のようにする」の意の動詞を作る接尾語。

**4 筒の中光りたり**　文末が「けり」から「たり」に変化。以下、終止形、「たり」、「ぬ」文末が多く、「けり」は少ない。物語世界の現在が叙述の基調となる。

**5 三寸ばかり**　「三」は、この物語の数の基本となっている。「三月」（四七・2）「三日」（四七・12）などとある。

**5 うつくしうて**　平安時代の「うつくし」は、①（幼い者・小さい物などが）かわいらしい、愛らしい。②（見た目に）美しい。③立派だ（②③を認めない説もある）。ここは最も基本的な①の意。

**5 言ふやう**　「言うことには」。「やう」は形式名詞的に用いて、発言や思考の内容の引用文を導く。「言ふやう、『…』とて」は漢文訓読的表現。

**5 朝ごと夕ごと**　対句的な表現。「ごと」は

びの法則により、結びが連体形になっている。[2]ぞ・か・や

**問**　**「その竹の中に」（３行目）の「その」とは何を指しているか。**

**答**　翁が毎日取っていること。

**補答**　だからこそ翁は、かぐや姫を自分の子になる人だ、と思ったのである。

**問**　**「あやしがりて」（４行目）について、「あやしがる」は形容詞「あやし」から派生した動詞であるが、その意味は、大別して「怪し」と「賤し」という二つの表記によって示すことができる。ここでの意味はどちらに当てはまるか。**

**答**　怪し

**問答**　**「いとうつくしうてゐたり。」（５行目）より、現代語と形は同じでも意味の異なる語を二つあげ、それぞれ、今と昔とでどのように意味が異なっているか説明せよ。**

**答**　・うつくしう…（今）きれいで（昔）かわいらしく　・ゐ…（今）存在して（昔）すわって

**問**　**「うつくしう」という表現は「うつくしく」から変化したものであるが、このような音の変化を何と言うか。**

**答**　（ウ）音便

**問答**　**第一段落では、かぐや姫はどのように形容されているか。また、成長後の形容はどの**

---

「…のたびに、…の全てに」の意の接尾語。

**6おはする**　竹の中にいた人を、翁は神聖な存在だと思って敬語を使う。下の「子になり給ふべき人」の「給ふ」も同じ。天から自分に授けられた人、という意識が敬語で表現されたとも考えられる。

**6知りぬ**　「知る」の内容は「子になり給ふべき人」であり、倒置した表現である。

**6子になり給ふべき人**　「籠（こ）―子」を掛詞的に重ねた洒落。後文に「籠（こ）に入れて」（四六・８）とあるように、竹かごを「籠（こ）」と言った。（竹の中にいたのだから）竹が籠（こ）になるように、わが子になってくださる人。

**6なめり**　断定の助動詞「なり」の連体形に推定の助動詞「めり」が付いた「なるめり」が撥音便化した「なんめり」の「ん」を表記しない形。普通「ん」を補って「なんめり」と読む。「めり」は竹の中にいるという視覚的状況に基づく推定。

**7手にうち入れて**　「うち」は、動作に「ひょいと、ちょっと、さっと、すっかり」などの感じを添える接頭語。竹の中にいた人が、小さくて軽いことが分かる。

**7妻の嫗**　「嫗」は「翁」の対。

**7預けて養はす**　「任せて養育させる」。「預く」は「世話・管理を人に任せる」の意。ここでは食事や衣服の世話を指すのであろう。「養はす」は助動詞「す」が未然形に接続することが分かりやすい例。

**8幼ければ**　「幼し」の「幼少だ、未熟だ」の意から、かぐや姫の背丈をいうとする通説に従うが、一説に、「（翁たちの）思慮が足りないので」の解もある（上坂信男「竹取物語全評釈」）。

**8籠に入れて**　「籠」は「和名類聚抄（わみょうるいじゅうしょう）」器皿（きべい）部・竹器類に「籠（略）〈和名古（略）〉竹器也」とある。

**9竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけてのちに竹取るに**　「たけ―と」の音が繰り返されてリズミカル。口承の語りを模した表現。

**9節を隔ててよごとに**　「よ」は竹の節と節との間の空洞部分。先出の「筒」（四六・４）は外側から捉えた表現。竹に関する記述が詳細である。「和名類聚抄」草木部・竹具に「〈両節之間俗云与〉」とある。

**10黄金**　金塊と考えてもよいが、砂金が妥当であろう。大判小判ではない。

**10豊かになりゆく**　「ゆく」は動作が次第に進行、または継続する意を添える補助動詞。

**ように変化しているか。**

答　最初は「うつくし」（かわいらしい）と表現されているが、成長後は「けうらなり」（清らかで美しい）と表現されている。

補　「けうらなり」は最高の美しさをいい、輝くような美しさを表す。小さいときから、大人になるにしたがって、かぐや姫の神々しい美しさが際だってくる様子が分かる。

**問　「ゐたり」（５行目）とあるが、現代語の「いる」と古語の「ゐる」の意味の違いを答えよ。**

答　現代語「いる」は人や動物の存在を表すが、古語「ゐる」は「座る」の意が原義。

補　生徒は違いを意識していないことが多いので、注意したい。

**問　「手にうち入れて」（７行目）という翁の行動からどのような様子が分かるか。**

答　手の平でそっと包み込むようにする様子。かぐや姫が抱けないほど小さい感じ。翁がかぐや姫を手の中にそっと包み込むようにして、大切に持って帰る様が想像できる。

**問　出生が不可思議なものに対して、畏敬の念を示すという当時の考え方がうかがわれる語（敬語）を四六ページより二つ抜き出せ。**

答　おはする　給ふ

**問　「わが朝ごと夕ごとに…人なめり。」（５行目）について、**

---

**●四七ページ**

**1すくすくと大きになりまさる**　成長の速いさまを言う。竹の生長の速やかさが連想され、かぐや姫に竹の精としての印象が加わる。「すくすく」はまっすぐの意の「直ぐ」を重ねた表現。「うつほ物語」俊蔭巻に「この子はすくすくと引きのぶる物のやうに大きになりぬ。」の例がある。

**2よきほどなる人**　一人前の大きさの人。「大和物語」一七三段に「たけだちいとよきほどなる人」と、背丈の高さをいう例がある。

**3髪上げ**　垂らしていた髪を結い上げること。女子の成人儀礼。通常十二～十四歳頃に行う。ふだん長い髪を垂らしている平安時代の貴族女性も、儀式の際には髪を「上げ」たと思われるが、具体的な髪型は不明。必要に応じてインターネット等で「大垂髪（おすべらかし）」の語を検索したり、小町谷照彦・倉田実編「王朝文学文化歴史大事典」（笠間書院、平二十三）の「通過儀礼」の項などを参照したりするよう指導してもよい。

**3さうして**　諸説あるが、「さうす」を「さまざまに準備する、手配する」の意と解する通説に従う。日常の世話を嫗に任せた翁も、儀礼的行事の準備には奔走する。

**4裳着す**　「裳」は、腰の後ろを覆う装飾的な衣。女性の正装に用いた。初めて裳を着用することが髪上げとともに女子の成人儀礼となっていて、「裳着（もぎ）」という。裳着は、結婚を念頭に行われることが多かった。髪上げ・裳着の実施は、翁がかぐや姫を貴族の姫君のように扱うことを示す。また、そうする財力をすでに蓄えていたと読める。

**4帳**　遮蔽具の布。具体的には几帳など。一説に帳台（ちょうだい）（浜床（はまゆか）という台座の上に畳を敷き、四方に帳を垂らした貴人の座所）。

**4いつき養ふ**　「いつ（斎）く」は「神などの霊威を畏れ敬い、身を潔斎して祀り仕える」が原義。ここは神を敬うように大切にかしずくこと。翁は姫を見つけたときにも、神聖な子と信じ、「おはす」「給ふ」と敬語を使っていたが、美しく成長した姫をますます大切にするのである。

**5かたち**　平安時代には、人について用いられる場合、顔だち・容貌を指すことが多い。「まみ、口つき、いと愛敬づき、はなやかなるかたちなり」（「源氏物語」空蟬巻）などの例がある。

**5けうらなる**　「けうらなり」（「キョーラナ

**問** 1 **「知りぬ」とは、何によって、何を知ったのか、簡潔に説明せよ。**

2 **この部分には、一種の言葉遊びとも言える洒落が含まれている。どういう点か、具体的に説明せよ。**

**答** 1 自分の仕事と縁のある竹の中から見つけたということによって、三寸ばかりの美しい人が「子になり給ふべき人」であることを知った。2「子」を「籠」との掛詞として使っている点。

**問** **かぐや姫の小さい姿を印象づける表現を、第一段落より二箇所抜き出せ（「三寸ばかりなる人」を除く）。**

**答** ・手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。
・いと幼ければ、籠に入れて養ふ。

**問** **「よごとに、黄金ある竹を見つくること重なりぬ。」（9行目）とあるが、この結果、翁の境遇はどうなったか、本文中より適切な語句（五字）を抜き出せ。**

**答** 勢ひ猛の者

**● 四七ページ**

**問** **「すくすくと大きになりまさる。」（1行目）とは、どのような様子を表現しているか。**

**答** 竹の生長の速さをイメージとして重ねていて、ぐんぐん大きくなっていく様子。

**補** たとえば、真竹は一日に一メートルも伸びることもあり、その生長の仕組みはいまだに科学的に解明されていない部分があるという。このようにまっすぐに生長し、緑が続く竹は、神の依代（よりしろ）となる神聖なものとして、古来より神事などに用いられてきた。かぐや姫はその竹の申し子のように表現されている。

**問** **「よきほどなる人」（2行目）とは、どのような人か。**

**答** 成人した一人前の女性。結婚できるぐらいの年齢の女性。髪上げや裳着の儀式をするにふさわしい年頃・背丈の人。

**問** **当時の女子の成人儀式を二つ、四七ページよりあげよ。**

**答** 髪上げ　裳着す

**問** A **「帳のうちよりも出ださず、いつき養ふ。」（4行目）とは、どのような育て方なのか、説明せよ。**

B **翁と嫗が、かぐや姫を異常なほどに保護して大切に養育したことを示す一文を、本文中より抜き出せ。**

**答** A 高貴な家の姫君のように、身内以外の目に触れないように育てる（外の風に全然触れさせないほどに保護して、大切に養育する）。B 帳のうちよりも出ださず、いつき養ふ。

**問** **「屋のうちは暗き所なく光満ちたり。」（四七・5）という表現の効果として適切なもの**

---

リ」と読む）は「きよらなり」の転とする説に従う。「清らかで美しい」の意。最高の美しさを形容する。

**6 心地悪しく**　「気分が悪く」。次に「腹立たしきこと」とあるので、ここは身体的な病をいうのであろう。

**8 腹立たしきことも慰みけり**　自動詞の「慰む」（マ行四段）は「心が晴れる、心が静まる、なごむ」の意。

**9 猛**　「猛なり」は盛んなさま、壮麗なさまなどを表す語。荒々しいの意はない。

**11 御室戸斎部の秋田**　「御室戸」は地名。山城の国宇治郡の地名とも、大和の国磯城郡の三輪山を指すともいう。「斎部」（「忌部」とも）は朝廷の神事を掌った氏族の名。一方、竹は、生長の速さが霊威を感じさせ、稈（かん）が中空であることから、神霊の依代に適した植物と考えられ、神事に用いられた。竹取の翁は、神事を介して斎部氏と関わる人物として設定されたのかもしれない。名の「秋田」は五穀の稔りを連想させる。

**12 なよ竹のかぐや姫**　しなやかで光り輝く女性の意を込めた名。姫の出生の経緯を踏まえよい意味の言葉を選んだ。「なよ竹」は「細くしなやかな竹」。「かぐ」は火の神、

のを次の中から二つ選べ。

(ア)かぐや姫の輝くばかりに美しい容貌を賛美している。

(イ)老夫婦が裕福な生活を望んでいることを暗示している。

(ウ)訪問客の多い華やかな生活ぶりを強調している。

(エ)かぐや姫が光り輝く別世界の人であることを暗示している。

答 (ア)・(エ)

問 ◉ 竹取の翁が「勢ひ猛の者」（9行目）になったのは、なぜか。

答 かぐや姫を見つけてから竹を取ると、節と節の間に黄金がつまった竹が見つかるようになったから。

問 竹取の翁が「勢ひ猛の者」になったことを裏付ける具体的な事柄を三つあげよ。

答 ①成人式を盛大に行った。②名付け親をわざわざ決めて命名式をした。③三日間も盛大な祝宴を催し、男たちを多数招待した。

問 次の傍線部の助動詞の意味を答えよ。

1 「付けさす。」（11行目）

2 「付けつ。」（12行目）

答 1 使役　2 完了

問 「いとかしこく遊ぶ。」（14行目）について、「かしこし」のここでの意味を答えよ。

答 盛大に

問 「世界のをのこ、…めでて惑ふ。」（14行目）について、

1 [易]対句表現になっている部分を抜き出せ。

2 [易]「あてなるもいやしきも」に適切な漢字を当て、現代語訳せよ。

3 [中]「音」を現代語（五字以内）に訳せ。

4 [易]「惑ふ」のここでの意味として適切なものを次の中から選べ。

(ア)困惑する　(イ)心を乱す　(ウ)うろたえる

答 1 ・あてなるもいやしきも　・得てしがな、見てしがな　2 貴なるも卑（賤）しきも　現代語訳＝身分の高い者も低い者も　3 うわさ　4 (イ)

問 かぐや姫が普通の人間ではなく、神秘的な存在であることを次の観点から、それぞれ二〇字以内で説明しなさい。

(1)出生時の様子　(2)養育者の生活変化　(3)成長過程　(4)日常の生活

答 (1)三寸くらいの非常に小さい人であった。(2)黄金入りの竹を見つけ、裕福になった。(3)三か月ほどで一人前の大きさに成長した。(4)家の中は光り輝き、翁の心を和らげた。

問 竹取物語のように神秘的な要素を含む物語のことを、一般的に何と言うか、次の中から正しいものを選びなさい。

(ア)歴史物語　(イ)歌物語　(ウ)伝奇物語　(エ)怪奇談

---

迦具土（かぐつち）の「かぐ」に同じ。「かぎろひ」（曙光）「かがよふ」（揺れながら光る）の「かぎ」「かが」と同根で、「キラキラと光る」の意（「輝く」は近世初期までカカヤクと清音なので、語源は別とされる）。「や」は「木（こ）の花の咲くや姫」の「や」と同じく詠嘆であろう。「古事記」中巻には垂仁天皇の妃に迦具夜比売命（かぐやひめのみこと）の名が見える。

**12 うちあげ遊ぶ**　「うちあぐ」は、手を打って歌い騒ぐことから転じて「宴会を催す」の意。「遊ぶ」は、祭りや宴、あるいは狩りや野遊びなどの非日常的な時間の中で、神霊と交感し、魂を賦活することが原義であり、特に歌舞管弦などを奏することに用いられた。

**13 うけきらはず**　「誰でも構わず」。受け入れることを嫌がらないことをいう。

**14 かしこく**　形容詞「かしこし」は連用形が副詞的に用いられると「たいそう、ひどく、盛大に」などの意になる。

**14 世界**　「この世、世の中、地方、あたり、別世界」などの意。元来は仏教語。

**14 あてなるもいやしきも**　対句的表現。形容動詞「あてなり」は①高貴だ、身分が高い。②上品だ、優雅だの意。ここでは①。「あ

問 答 (ウ) **竹取の翁のかぐや姫に対する愛情がうかがわれる箇所を現代語で三点にまとめて答えなさい。**

答 ①大切に家に持ち帰って、心をこめて育てた。②成人式をして、家の中から出さずに大切に育てた。③名を付けさせて、それを祝う宴を開いた。

---

てなる」「いやしき」はともに「者」を補って解する。

**15いかで**　願望の終助詞「てしがな」と呼応して「何とかして」。副詞の呼応については「古文を読むために5」を参照されたい。

**15得てしがな、見てしがな**　対句的並列表現。親兄弟でもない男性が、深窓の姫に会うことは、実質的に結婚を指すので、「得て…見て…」は同内容の反復である。「てしがな」は、本来、完了の助動詞「つ」の連用形＋自己の願望の終助詞「しが」（上代では清音「しか」）＋詠嘆の終助詞「な」であるが、一語化して終助詞となったと考えられることが多い。

**15音に聞き**　姫に会えない男たちは、うわさを聞いて、心をときめかせる。

**15めでて惑ふ**　「恋い慕って心が乱れる。」「めづ」は、対象に心ひかれて感嘆したり、愛したりすることを表す語。派生語に「めでたし」「めづらし」がある。

## 鑑賞

「竹取物語」は、「今は昔、…ありけり。」と、説話や物語の冒頭の常套表現で始まり、世の中にかつてあった（という建前の）珍しい出来事を語る物語の世界へと読者を誘う。

かぐや姫が竹取の翁に発見され、その養女となって成長する過程は、天人女房譚や小さ子譚、致富長者譚といった複数の物語の型を組み合わせて成り立っている。各々が一編の昔話になる不思議な話をいくつも集めて凝縮し、虚構としての「竹取物語」の世界が切り拓かれている。

そもそも「竹取の翁」も、「万葉集」巻十六には、丘の上で九人の仙女に会って和歌を詠みかわす人物として現れているのであり、不思議な出来事に遭遇する人間側の主人公として意図的に選ばれた可能性がある。また、物語に明確に描かれてはいないが、翁・嫗には子供がなく、姫を神からの授かり物と受けとめたように読める。物語全篇にあふれる翁の姫への愛情の源泉を、この点に求めてもよいだろう。

物語冒頭部において、不思議な出来事を感覚的に作り出している要素が「光」である。光る竹があって、その中に九センチメートルほどのかぐや姫がいた。神秘の存在は光とともに出現する。出現の際、光に包まれていたかぐや姫は、成長すると「屋のうちは暗き所なく光満ちたり」と光り輝く。現代でも、すばらしい人を評して輝いているという。言葉の虚構によって、比喩的な想像を現実として語るのである。光の形容は、「うつほ物語」の俊蔭の娘や仲忠、「源氏物語」の光源氏に受け継がれる。仏教の仏・菩薩も光を放つ。電気による照明器具が発達した現代からは想像しがたい価値が、光にあったのだろう。光るかぐや姫は、翁の心身を癒した。医療技術に乏しい時代、病を治癒する力にも特別な価値があったはずだ。

物語のかぐや姫を貴族社会へと結びつけるのが、姫の成人儀礼である。髪上げや裳着、命名式を経て祝宴を開くことにより、かぐや姫の存在は世間に知られ、求婚譚へ展開する。姫に貴族女性の成人儀礼を行うことは、翁の愛情ゆえであり、またそれを可能にする財力を竹の中の黄金がもたらした。物語は巧みに構成されていると言えよう。また、平安時代中期には貴族女性の髪型は垂髪を基本としているにもかかわらず、「髪上げ」が儀礼として残っていることを、現代の成人式の装いと比べてみるのも興味深いであろう。

物語の文体にも目を向けよう。「竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけてのちに竹取るに」と、口承の語り口を思わせる反復が見られる一方、「翁、言ふやう、『…』とて」という漢文訓読的表現があり、両者の複合が作者の文体を作ったと見られる。また、漢詩文の影響とは言い切れないが、「朝ごと夕ごと」、「あてなるもいやしきも」、「得てしがな、見てしがな」といった対句的な表現も注意される。